氏　　名	MELADZE TAMAR
学 位 の 種 類	博士（世界遺産学）
学 位 記 番 号	博甲第　10343　号
学位授与年月	令和　4　年　3　月　25　日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学位論文題目	Preservation, Restoration and Use of Religious Monuments in Soviet and Contemporary Georgia: – research based on the case of Bagrati Cathedral ソビエトと現代ジョージアにおける宗教的遺産の保存および復元 バグラティ大聖堂の例に基づいて

主　　査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	上北　恭史
副　　査	筑波大学准教授	博士（建築学）	下田　一太
副　　査	筑波大学助教	博士（理学）	池田真利子
副　　査	京都工芸繊維大学助教	博士（工学）	アレハンドロ・マルティネス

論文の内容の要旨

MELADZE TAMAR 氏の博士学位論文は、2017 年に世界遺産の構成資産から削除されたジョージアのバグラティ大聖堂の復元に関する問題について、ジョージアの文化、政治・宗教的背景から復元に至るプロセスを解明し、遺産の真正性の観点から議論することによって、世界遺産の復元における問題を明らかにする研究である。

本論文は 7 章から構成され、以下にその概要を述べる。

第 1 章では、著者は研究の背景として遺産の復元について取り上げ、歴史的に行われてきた復元事例をもとに保存修復の国際憲章の流れに沿って復元の概念について説明している。そして世界遺産条約履行のための作業指針を通して、本論文で使われる普遍的価値や真正性、完全性などの基本用語について説明している。研究の目的として、バグラティ大聖堂の世界遺産構成資産の削除に至るプロセスにおいて、ジョージアの政治的、社会的、宗教的側面から、復元と世界遺産削除に至る理由を明らかにすることを設定している。

第 2 章では、著者はバグラティ大聖堂の歴史的、文化的背景から、世界遺産として登録される普遍的価値について述べている。バグラティ大聖堂は、中世ジョージア王国を建国したバグラト 3 世により 11 世紀に建設された、ジョージア正教会の教会堂である。17 世紀のオスマン帝国軍による砲撃で教会堂の天井は崩壊し廃墟となったが、その後も宗教的拠り所としてみなされていたという。バグラティ大聖堂は中世ジョージアの建築的価値をもつ遺産であり、1994 年にその価値が認められて世界遺産に登録されている。後半で議論するために、廃墟になった経緯、建築的特徴、失われた建築部位の説明を行い、本論文の議論に必要な要点を整理している。

第 3 章では、著者はソビエト連邦時代におけるジョージアの遺産保護について説明している。19 世紀にジョージアはロシア帝国に併合され、その後、ソビエト連邦の構成国になった。ソビエト連邦時代には宗教活動が認められず、ジョージア正教会の活動の中止、教会堂施設の利用も禁止されていた。しかしソビエト連邦では文化遺産の保存の体制が構築され、バグラティ大聖堂も修復が行われている。著者は歴史的資料からソビエト連邦時代の修復方法について、現在のヨーロッパにおける保存修復方法と同じような、残された材料を優先して保存し

ていく、という考え方を踏襲していることを明らかにし、当時、バグラティ大聖堂も劣化箇所に対する修復措置がなされていたことを指摘している。

第 4 章では、ソビエト連邦崩壊に伴う、ジョージア独立の経緯と国家のアイデンティティ形成について説明している。民族の交差点となるコーカサス地方は、歴史的にもローマ帝国、東ローマ帝国、ペルシアなどの大国の影響を受け、また多民族からなる住民のために絶えず紛争が起きやすい場所であった。19 世紀初頭にソビエト連邦に併合されると、ジョージアの政治的選択権、宗教の自由、自国の文化の制約を受け、ジョージアのアイデンティティは喪失してしまう。ソビエト連邦崩壊ののち、1990 年に独立してからも革命が起きるなど不安定な状況が続いた。国家の安定のために強い指導者と、民族のアイデンティティ確立のためにジョージア正教会の基盤が必要とされたことを説明している。また憲法で、教会堂はジョージア正教会に属し、それが廃墟としての遺産であっても、教会堂であればジョージア正教会の所有になる。たとえ教会堂が国の文化遺産であっても、ジョージア正教会に属する教会堂の修復には、正教会の意向が強く反映されることを説明している。

第 5 章では、世界遺産の構成資産であったバグラティ教会堂が、修復事業を通じて世界遺産から削除されていく過程を詳細に述べている。2002 年に建立 1000 周年を記念して、廃墟で残されてきたバグラティ教会堂に対して、宗教的活動をできるように修復する計画をジョージア正教会が打ち出した。ジョージア政府から提出された最初の修復計画は、失われていた教会堂のドームの再建であり、その荷重を支えるために 10 本残っていた既存の柱の 5 本を解体し、鉄筋コンクリート柱に置き換えることで耐震性能の確保を図るものであった。これに対して世界遺産委員会や世界文化遺産諮問機関イコモス（国際記念物遺跡会議）は、残された遺物の破壊とバグラティ教会堂の普遍的価値に影響を与えるという懸念を表明し、ジョージア政府から提出された修復案を却下している。しかしながらジョージア政府は修復計画を別の建築家に依頼しながらも、ドームの再建を進めた結果、2017 年の第 41 回世界遺産委員会は、バグラティ大聖堂を世界遺産の構成資産から削除することを決議した。これらの推移を世界遺産委員会の議事録、ジョージア政府の資料、修復計画を策定した建築家やイコモス専門家へのインタビューを通して明らかにしている。

第 6 章では、バグラティ大聖堂の世界遺産削除の分析を通して議論を展開している。ジョージア語では修復（restoration）という言葉に復活の意味を含んでいる。また廃墟という言葉にはかつて教会堂があった場所、という意味を含むという。これらのジョージアの言葉に含む意味として、文化的伝統の継続と宗教的継承は互いに密接に結びついていると推測している。1991 年の独立の後にも政変や革命が相次ぎ、祖国の統一のために強力なリーダーシップをもつ当時のサカシビリ大統領は、バグラティ大聖堂の修復を国家的プロジェクトに位置づける必要があった。そしてジョージア正教会は宗教的復興のためにバグラティ大聖堂を復活させることが必要であった。彼らにとってのバグラティ大聖堂は廃墟ではなく、国家の復活、宗教の復活という普遍的意味を重視した結果、復元に至ったのではないかと推測している。ジョージア国内でもバグラティ大聖堂の修復に否定的な意見を持つ専門家もいたが、ロシアなどの近隣諸国からの圧力や国内諸民族の抵抗に対して、国家統一・復興という目標の前に十分な議論がされず、復興事業が進められていった可能性について指摘している。

第 7 章では結論を示し、さらに復元の議論を展開している。遺産の持つ真正性は立場によって解釈が異なるあいまいさを持っていると著者は考える。ヨーロッパで発達してきた保存修復の概念は、多くの専門家たちの議論を通して一般的手法として定着してきている。しかしながら物的な遺物に優位性を与えるという専門的価値観は、廃墟というものを失われたものではなく再生するものと信じる価値観とは相いれない。国家の継承や宗教的復興という価値観を重視する人たちとのあいだで十分な議論をすることによって、普遍的価値について立場を超えて理解しあえる、という世界遺産のもつ基本的理念に立ち返る必要性に意義があると、展望を述べている。

審査の結果の要旨

（批評）

MELADZE TAMAR 氏の博士学位論文は、世界遺産の構成資産から削除されたジョージアのバグラティ大聖堂の復元に関する問題について、国際機関の専門資料や復元に携わった建築家・専門家のインタビューを通して修復問題の複雑さを明らかにしている。廃墟を死んでしまった遺産と捉える従来の視点に対して、生き続けてい

る遺産としてみる宗教的、民族的視点に理解を示し、異なる立場からみる遺産の真正性の可能性を示唆している。多様な立場を受け入れつつ、対話によって世界遺産の普遍的価値の議論を深めていく必要性を示唆する点において、世界遺産学分野にふさわしい研究であると評価される。

令和 3 年 12 月 9 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（世界遺産学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。